一日の労苦

太宰治

一月二十二日。

日々の告白という題にしようつもりであったが、ふと、一日の労苦は一日にて足れり、という言葉を思い出し、そのまま、一日の労苦、と書きしたためた。

あたりまえの生活をしているのである。かくべつ報告したいこともないのである。

舞台のない役者は存在しない。それは、滑稽（こっけい）である。

このごろだんだん、自分の苦悩について自惚（うぬぼ）れを持って来た。自嘲し切れないものを感じて来た。生れて、はじめてのことである。自分の才能について、明確な客観的把握を得た。自分の知識を粗末にしすぎて

いたということにも気づいた。こんな男を、いつまでも、ごろごろさせて置いては、もったいない、と冗談でなく、思いはじめた。生れて、はじめて、自愛という言葉の真意を知った。エゴイズムは、雲散霧消している。

やさしさだけが残った。このやさしさは、ただものでない。ばか正直だけが残った。これも、ただものでない。こんなことを言っている、おめでたさ、これも、ただものでない。

その、ただものでない男が、さて、と立ちあがって、何もない。為すべきことが何もない。手がかり一つな

いのである。苦笑である。

発表をあきらめて、仕事をしているというのは、これは、作者の人のよさではない。これは、悪魔以上である。なかなか、おそろしいことである。

くだらないことばかり言っている。訪客あきれて、帰り支度をはじめる。べつに引きとめない。孤独の覚悟も、できている筈（はず）だ。

もっともっとひどい孤独が来るだろう。仕方がない。かねて腹案の、長い小説に、そろそろ取りかかる。

いやらしい男さ。このいやらしさを恐れてはならない。私は私自身のぶざまに花を咲かせ得る。かつて、

排除と反抗は作家修行の第一歩であった。きびしい潔癖を有難いものに思った。完成と秩序をこそあこがれた。そうして、芸術は枯れてしまった。サンボリスムは、枯死の一瞬前の美しい花であった。ばかどもは、この神棚の下で殉死した。私もまた、おくればせながら、この神棚の下で凍死した。死んだつもりでいたのだが、この首筋ふとき北方の百姓は、何やらぶつぶつ言いながら、むくむく起きあがった。大笑いになった。百姓は、恥かしい思いをした。

百姓は、たいへんに困った。一時は、あわてて死んだふりなどしてみたが、すべていけないのである。

百姓は、くるしい思いをした。誰にも知られぬ、くるしい思いをした。この懊悩（おうのう）よ、有難う。

私は、自身の若さに気づいた。それに気づいたときには、私はひとりで涙を流して大笑いした。

排除のかわりに親和が、反省のかわりに、自己肯定が、絶望のかわりに、革命が。すべてがぐるりと急転廻した。私は、単純な男である。

浪漫（ろうまん）的完成もしくは、浪漫的秩序という概念は、私たちを救う。いやなもの、きらいなものを、たんねんに整理していちいちこれの排除に努力しているうちに日が暮れてしまった。ギリシャをあこがれてはならな

い。これはもう、はっきりこの世に二度と来ないものだ。これは、あきらめなければいけない。これは、捨てなければいけない。ああ、古典的完成、古典的秩序、私は君に、死ぬるばかりのくるしい恋着の思いをこめて敬礼する。そうして、言う。さようなら。

　むかし、古事記の時代に在っては、作者はすべて、また、作中人物であった。そこに、なんのこだわりもなかった。日記は、そのまま小説であり、評論であり、詩であった。

　ロマンスの洪水の中に生育して来た私たちは、ただそのまま歩けばいいのである。一日の労苦は、そのま

ま一日の収穫である。「思い煩（わずら）うな。空飛ぶ鳥を見よ。播（ま）かず。刈らず。蔵に収めず。」

骨のずいまで小説的である。これに閉口してはならない。無性格、よし。卑屈、結構。女性的、そうか。復讐心、よし。お調子もの、またよし。怠惰、よし。変人、よし。化物、よし。古典的秩序へのあこがれやら、訣別（けつべつ）やら、何もかも、みんなもらって、ひっくるめて、そのまま歩く。ここに生長がある。ここに発展の路がある。称して浪曼的完成、浪曼的秩序。これは、まったく新しい。鎖につながれたら、鎖のまま歩く。十字架に張りつけられたら、十字架のまま歩く。牢屋

にいれられても、牢屋を破らず、牢屋のまま歩く。笑ってはいけない。私たち、これより他に生きるみちがなくなっている。いまは、そんなに笑っていても、いつの日にか君は、思い当る。あとは、敗北の奴隷か、死滅か、どちらかである。

言い落した。これは、観念である。心構えである。日常坐臥は十分、聡明（そうめい）に用心深く為すべきである。

君の聞き上手に乗せられて、うっかり大事をもらしてしまった。これは、いけない。多少、不愉快である。

君に聞くが、サンボルでなければものを語れない人間の、愛情の細かさを、君、わかるかね。

どうも、たいへん、不愉快である。多少でも、君にわからせようと努めた、私自身の焦慮に気づいて、私は、こんなに不機嫌になってしまった。私自身の孤独の破綻が不愉快なのである。こうなって来ると、浪曼的完成も、自分で言い出して置きながら、十分あやしいものである。とたんに声あり、そのあやしさをも、ひっくるめて、これを浪曼的完成と称するのである。

私は、ディレッタントである。物好きである。生活が作品である。しどろもどろである。私の書くものが、それがどんな形式であろうが、それはきっと私の全存在に素直なものであった筈である。この安心は、たい

したものだ。すっかり居直ってしまった形である。自分ながらあきれている。どうにも、手のつけようがない。

ひとつ君を、笑わせてあげよう。これは小声で言うことであるが、どうも私は、このごろ少し太りすぎてしまいまして。

できすぎてしまった。図体が大きすぎて、内々、閉口している。晩成すべき大器かも知れぬ。一友人から、銅像演技（スタチュ・プレイ）という讃辞を贈られた。恰好（かっこう）の舞台がないのである。舞台を踏み抜いてしまう。野外劇場はどうか。

俳優で言えば、彦三郎、などと、訪客を大いに笑わ

せて、さてまた、小声で呟くことには、「悪魔（サタン）はひとりすすり泣く。」この男、なかなか食えない。
作家は、ロマンスを書くべきである。

底本：「太宰治全集10」ちくま文庫、筑摩書房
1989（平成元）年6月27日第1刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房
1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月
初出：「新潮」
1938（昭和13）年3月1日発行
入力：土屋隆
校正：noriko saito
2005年3月17日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。